

小説における「コノ」「ソノ」の指定指示用法

——後続名詞類との関わりを中心に——

張 子如

1. 先行研究と問題の所在

文脈指示の「コノ」「ソノ」は代行指示と指定指示に分けることができる。筆者(2014)は小説における地の文の文脈指示の「コノ」「ソノ」の後続名詞類について、いくつかのカテゴリーに分けて代行指示を中心に考察した。しかし、後続名詞類と全体で先行文脈と照応する指定指示の場合について、十分に検討していない。そこで、本稿では、その続きとして、小説の地の文における指定指示の場合に「コノ」「ソノ」の後続名詞類について、カテゴリーを分けてその特徴を考察する。

林(1983)は文脈指示を二分類した上で、「夢十夜」における指定指示について、「コノ」の 22 例のうち、13 例は後続名詞類は先行文脈の反復で、「反復指定の原理に依っており」、残りの 9 例は後続名詞類は先行文脈の「レベル転換による表現のとらえ直しの原理が働いている」。「ソノ」の 23 例のうち、後続名詞類の反復は 7 例で、形容動詞の反復やとらえ直しは 16 例であると指摘している。本稿では前者の「反復」を反復とし、後者の「意味上のとらえ直し」を言い換えとする。また、前述したように、「コノ」「ソノ」の後続名詞類に相当する語句は先行文脈に出ている場合を指定指示、出ていない場合を代行指示とするため、林の言うとらえ直しの一部分を代行指示とする。

庵(2007)は林の考察を踏まえ、指定指示の場合に「コノ」「ソノ」の交代可能性を通して、両者が用いられる文脈を考察し、その相違点を指摘した。先行文脈の「言い換え」や「ラベル貼り」の場合は「コノ」しか使えないと

述べている。庵の言う「言い換え」は「コノ」の後続名詞類は言い方を換えて先行詞を表現する場合である。たとえば先行詞は人物の名前「エリザベス」で、後続文脈で指示表現「この女優」を用いており、「女優」は「エリザベス」の「言い換え」である。「ラベル貼り」は「先行する発話や文連続を指示しそれらに名付けをする（ラベルを貼る）用法である」。次に庵の挙げた「ラベル貼り」の例を見てみよう。

- 夜、ある町の外科医のところへ大怪我をした男が治療を受けにきた。住所をきくと隣の町から来たという。「隣の町なら、有名な外科医がいるのに、どうしてわざわざここまで来たんです？」
このジョークのおちは読者に考えていただこうと思う。

（織田正吉『ジョークとトリック』）

庵は「このジョーク」は波線のついた先行文脈の長い内容を名付けをする（ラベルを貼る）用法であると指摘している。しかし、「ラベル貼り」も先行文脈の反復ではなく、先行文脈を言い換えて指示語を用いた表現であるため、「言い換え」の一種であると考えられる。また、庵の指摘と違い、場合によって、「ソノ」も使えるのではなかろうかと思われる。たとえば、

- （１）玩具の兵隊のような派手な制服を着たサーカスの男が、一郎の手にグラブをはめた。檻の中に入れられた。直立しているカンガルーと向い合うと、その動物の方が一郎より背が高かった。カンガルーは、じっと立っているだけである。しかし、一郎が拳を突出すと、動物も反射的にグラブをはめた前肢をピョコンと振る。

（吉行淳之介「樹々は緑か」）

「その動物」は先行の「カンガルー」を指示し、「動物」は「カンガルー」の上位語で、言い換えである。このように、「その」が言い換えに用いられているのである。そこで、「コノ」「ソノ」が指定指示である場合、その用いられる文脈を考え直す必要があると思われる。

このように、先行研究は指定指示の下位分類について統一した基準がない。そこで、統一した観点で、「コノ」「ソノ」の指定指示用法を考察する必要がある。また、庵のいう人物の「エリザベス」が後続文脈で「この女優」と表現が換えられ、「女優」が「エリザベス」の上位語として表現されている。そ

れに対して、「ラベル貼り」の「このジョーク」は先行の長い事柄をまとめて表現しており、人物のカテゴリーと違う言い換えであると考えられる。このように、後続名詞類のカテゴリーが違っていると、指定指示用法も異なる可能性があるのではないだろうかと思われる。そこで、統一した観点で指定指示を分類し、「コノ」「ソノ」の後続名詞類との関わりを考察する必要がある。

本稿では先行研究を踏まえ、指定指示の下位分類を規定し、分類した上で、小説の地の文における指定指示の「コノ」「ソノ」の用例を調査し、後続名詞類をいくつかのカテゴリーに分けて考察し、それぞれの指定指示用法の特徴を明らかにする。

2. 「コノ」「ソノ」の文脈指示用法の分類

本稿では、先行研究をふまえ、指定指示の分類を次のように規定する。まず指定指示を「反復」と「言い換え」の二種類に分け、「言い換え」の下位分類として、「上位型の言い換え」、「内包型の言い換え」、「ラベル貼り」、「類義型の言い換え」と「カテゴリーの転換」の五種類に分類しておく。以下は例を挙げて説明する。

2.1 反復

本稿の反復とは、先行文脈にある名詞類が「コノ」「ソノ」の後続名詞類として再び出現する場合である。

(2) しかし、もっと彼女たちに意外だったことは、そのお時さんが、
傍の若い男と親しそうに何か話していることだった。その男の横
顔は、彼女たちに見おぼえがなかった。 (松本清張「点と線」)

「その男」は先行の「傍の若い男」を指示しており、「男」が反復されている。

2.2 言い換え

本稿の言い換えとは、「コノ」「ソノ」の後続名詞類は照応となる先行詞が先行文脈に出現していないが、先行文脈には相当する語句がある。具体的に次の五種類に分類する。

2.2.1 上位型の言い換え

庵は言い換えの一種として、「上位型の言い換え」を提唱した。先行詞を

その上位概念で言い換えたものは「上位型の言い換え」であると述べている。本稿はその分類に従う。

- (3) 徳川時代には京都の罪人が遠島を言い渡されると、高瀬舟で大阪へ廻されたそうである。それを護送して行く京都町奉行附の同心が悲しい話ばかり聞せられる。或るときこの舟に載せられた兄弟殺しの科を犯した男が、少しも悲しがついていなかった。

(森鷗外「高瀬舟」)

「この舟」は先行文脈の「高瀬舟」の言い換えである。「舟」は様々な舟の集合であり、「高瀬舟」はその中の一種にすぎない。つまり、「舟」は「高瀬舟」の上位語である。

2.2.2 内包型の言い換え

庵は「上位型の言い換え」以外に、「内包型の言い換え」も言い換える一種としている。後続文脈で先行詞をその属性で言い換えた場合は「内包型の言い換え」と言う。

- (4) 去年の秋、俊介は高原のササ原で一匹のイタチに出会ったことがある。ふだんは用心深い夜行性のこのけものが、そのときはなを思ったのか、白日の下に全身をさらして、広い野原を飛ぶように走っていた。倒木をとびこえ、草むらにもぐり、まるで小さな火のようにキラめきつつ、彼の姿は見る見る視界のかなたに消えていった。(略)それからというものは、イタチを見れば、きまってこのササ原の孤独な走者を思い出す。

(開高健「パニック」)

先行文脈の「高原のささ原」の「一匹のイタチ」を後続文脈で、「このササ原の孤独な走者」で再指示している。「ササ原の孤独な走者」は「一匹のイタチ」の属性であり、内包型の言い換えである。

2.2.3 ラベル貼りの言い換え

ラベル貼りは以下の「この作業」のような表現で先行内容を承けて、まとめるような言い換えである。庵が提唱した概念であるが、本稿では言い換える一種とする。

- (5) 慈念は慈海の胸に耳をあててじっとしていた。やがて鉢頭をう

なずかせて立ち上ると表庭へもどった。百日紅の下の蔭の葉を手くらがりの中でむしり取りはじめた。この作業は一時間余かかった。慈念の手は蔭のアクで黒くよごれた。慈念はその葉を床下に何どもはこんだ。(水上勉「雁の寺」)

「この作業」は先行の慈念が「百日紅の下の蔭の葉を手くらがりの中でむしり取」ることを指示している。先行文脈に「作業」という語が出ていないが、「百日紅の下の蔭の葉を手くらがりの中でむしり取りはじめた」という動作の叙述があり、「作業」の具体的な内容であるので、言い換えである。先行内容にラベルを貼るように、「作業」という表現でまとめて承けている。

2.2.4 類義型の言い換え

「コノ」「ソノ」の後続名詞類は先行詞の意味と似ており、先行詞を類義的な表現で言い換えた場合は「類義型の言い換え」と言う。

(6) 弟は剃刀を抜いてくれたら死なれるだろうから、抜いてくれと云った。それを抜いて遣って死なせたのだ、殺したのだとは云われる。しかしそのままにして置いても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと云ったのは、苦しさに耐えなかったからである。喜助はその苦を見ているに忍びなかった。苦から救って遣ろうと思って命を絶った。それが罪であろうか。殺したのは罪に相違ない。(森鷗外「高瀬舟」)

「その苦」は先行の「苦しさに耐えなかった」ことの言い換えである。「苦」は「苦しさ」と意味が似ており、類義型の言い換えである。この場合は反復に近いといえる。

2.2.5 カテゴリー転換

また、以下のような後続名詞類がカテゴリー転換のような現象を起こす言い換えもある。

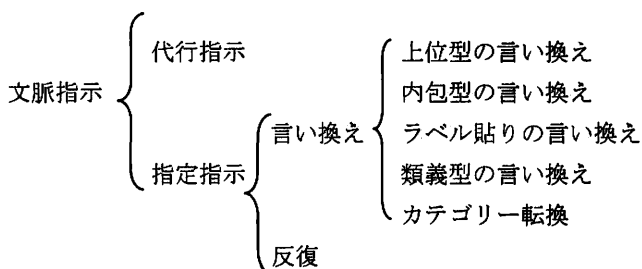
(7) さらに課長の個人的反撃をそらしておく必要がある。彼に対する反感を解消することだ。これには、ひとまずイタチの不正を見逃してやることだ。証拠の伝票やイタチや供応の事実の証言など、材料は豊富にこちらでにぎっているのだから、告発しようと思えばいつでもやれるわけだ。いざとなれば、まずい手だがこの刃を

チラつかせるということも考えられる。苦しまぎれだが、さしあ
たっているところピラミッドの重圧を逃げるにはこの手にたよ
るよりしかたないのだ。(開高健「パニック」)

「この刃」とは先行の波線のついたところの内容を指示し、告発の際の有
力な武器の意味である。比喩的なものであると言っても、先行文脈では「反
撃」や「告発」という事柄を示す表現であり、いきなり「刃」という違うカ
テゴリの表現を用いているため、カテゴリの転換と言える。

以上各分類の関係を図で表現すると、【図1】のようになる。

【図1 「コノ」「ソノ」の指示用法の分類】



3. 後続名詞類と「コノ」「ソノ」の指示用法

【図1】の分類に沿って、CD-ROM版『新潮文庫の100冊』の20編の小
説(注1)における地の文の指定指示「コノ」「ソノ」の用例を調べると、【表
1】のような結果となる(参考として代行指示のデータも挙げておく)。

【表 1 資料における「コノ」「ソノ」の指示用法】

	指 定 指 示							代 行 指 示	合 計	
	反 復	言 い 換 え					小 計			
		上 位 型	ラ ベ ル	内 包 型	類 義 型	カ テ ゴ リ				小 計
コ ノ	128 (33%)	66	106	31	0	2	204 (53%)	332 (86%)	56 (14%)	388 (100%)
ソ ノ	294 (32%)	49	125	28	50	0	252 (27%)	546 (60%)	382 (41%)	928 (100%)

【表 1】に示したように、「コノ」「ソノ」はいずれも指定指示が多く、「コノ」は「ソノ」より比率が高いことが分かる。また、反復において、「コノ」「ソノ」は比率から見ればあまり差がない。一方、言い換えにおいて、「コノ」は 204 例で全体の 53% を占めており、「ソノ」は 252 例で全体の 27% を占めており、比率では、「コノ」は「ソノ」の 2 倍ほどとなっており、言い換えの用法が最も多いことが分かる。

さらに、言い換えの下位項目を見ると、「コノ」「ソノ」はいずれも「ラベル貼り」の用法が最も多く、次に多いのは「上位型」である。また、「カテゴリー転換」はあまり用いられないことが分かる。一方、「ソノ」は「類義型」も多く見られるのに対して、「コノ」が用いられないという相違点も見られる。要するに、指定指示において、「コノ」と「ソノ」は主に言い換えの場合に違いが見られると考えられる。

前節で述べたように、「コノ」「ソノ」の後続名詞類によって、指示用法や文脈展開の方向も違うため、その後続の名詞類が非常に重要である。以下は後続名詞類と「コノ」「ソノ」の指定指示用法との関わりを解明するために、【表 1】の詳細として、後続名詞類を幾つかのカテゴリーに分けて、各指示用法の特徴を具体的に考察する。

本稿で代行指示の場合と同じく、小説の地の文の文脈指示の「コノ」「ソノ」の後続名詞類を「人物」、「物質」、「人間行動」、「事態・様相」、「時間」、「場所」と「抽象的名詞」の七種類に分ける（注2）。上記の資料における用例を後続名詞類のカテゴリー別に整理すると、以下の【表2】のような結果となる。

【表2 資料における「コノ」「ソノ」の後続名詞類と指定指示用法】

		人物		物質		人間 行動		事態・ 様相		時間		場所		抽象的 名詞		合計	
		コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ	コ	ソ
反 復		36	76	34	123	10	16	11	41	4	12	32	22	1	4	128	294
言 い 換 え	上*	38	18	11	19	2	0	2	1	4	3	9	5	0	3	66	49
	ラ*	10	1	12	16	27	34	40	67	2	1	12	3	2	2	106	125
	内*	9	2	5	9	4	6	12	9	0	2	1	0	0	1	31	28
	類*	0	2	0	20	0	12	0	10	0	4	0	1	0	1	0	50
	カ*	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0
	小 計	57	23	29	64	33	52	54	87	6	10	22	9	3	7	204	252
合 計		93	99	63	187	43	68	65	128	10	22	54	31	4	11	332	546

* 上：上位型の言い換え ラ：ラベル貼りの言い換え 内：内包型の言い換え
類：類義型の言い換え カ：カテゴリー転換

【表2】に示したように、「コノ」は「人物」「人間行動」「事態・様相」「時間」「抽象的名詞」の大部分のカテゴリーにおいて、言い換えが多く見られ、「物質」「場所」の場合に反復が多く見られる。一方、「ソノ」は「人物」「物質」「時間」「場所」の場合に、反復が多く見られ、「人間行動」「事態・様相」「抽象的名詞」の場合に言い換えが多く見られる。つまり、「コノ」「ソノ」はいずれも「人間行動」「事態・様相」「抽象的名詞」の場合に言い換えが多く、「物質」「場所」の場合に、反復が多く見られるが、「人物」「時間」の場

合に、両者の異なるところが見られる。

以下は後続名詞類のカテゴリー別に指定指示の「コノ」「ソノ」の特徴を考察する。

3.1 後続名詞類が「人物」である場合

後続名詞類が人物である場合、【表 2】に示したように、「コノ」は言い換えの例が 57 例で多く見られるのに対して、「ソノ」は反復の例が 76 例で最も多く見られる。「コノ」は解説的な性質（注 3）を持つため、解説的な言い換えに多く用いられると考えられる。それに対して、「ソノ」は客観的・中立的な性質（注 4）を持つので、先行文脈に出てくる語句をそのまま反復することが多いと考えられる。

（8）五位は、風采の甚揚らない男であった。第一背が低い。それから赤鼻で、眼尻が下っている。口髭は勿論薄い。頬が、こけているから、頤が、人並はずれて、細く見える。唇は——々、数え立てていけば、際限はない。我五位の外貌はそれ程、非凡に、だらしなく、出来上っていたのである。

この男が、何時、どうして、基経に仕えるようになったのか、それは誰も知らない。（芥川龍之介「芋粥」）

「この男」は先行段落の「五位」（人物の官職）の言い換えであり、また「男」は「五位」の上位語である。このように、言い換えの場合に、「コノ」の後続名詞類として、「人」「男」「女」など先行人物を表す語句の上位語であるものが 38 例もあり、多く見られる。

また、「ソノ」の最も多く見られる反復の例を見てみよう。

（9）堯は鋪道が早くも疲労ばかりしか与えなくなりはじめるとよくそう思った。堯はそんなとき何時か電車のなかで見たある少女の顔を思い浮べた。

その少女はつつましい微笑を泛べて彼の座席の前で釣革に下がっていた。（梶井基次郎「冬の日」）

「その少女」は先行の「堯」が「電車のなかで見たある少女」を指しており、「少女」は反復である。先行文脈に既に出ている「少女」を再度用いて、「その少女」と表現する。

後続名詞類について、反復の場合は「コノ」「ソノ」はいずれも「人」「男」「少女」のような一般名詞もあれば、「弟子」「助手」「父」のような相対的な関係を表す語もあり、また、「志乃」、「慈海」など人物の名前を表す固有名詞もあり、表現の範囲に広がりが見られる。一方、言い換えの場合は、「コノ」「ソノ」はいずれも「男」、「女」、「人」のような先行文脈の上位語の使用度が最も高い。

3.2 後続名詞類が「物質」である場合

後続名詞類が物質である場合、「コノ」と「ソノ」はいずれも反復のほうが多く見られる。

- (10) 尤も、大饗に比しいと云っても昔の事だから、品数の多い割に碌な物はない、餅、伏菟、蒸鮑、干鳥、宇治の氷魚、近江の鮒、鯛の楚割、鮭の内子、焼蛸、大海老、大柑子、小柑子、橘、串柿などの類である。唯、その中に、例の芋粥があった。五位は毎年、この芋粥を楽しみにしている。(芥川龍之介「芋粥」)

「この芋粥」は前文の「芋粥」の反復である。【表2】に示したように、「コノ」は言い換え(29例)より反復の例(34例)がやや多く見られる。この傾向は物質のみならず、場所の場合も見られる。

次の「ソノ」の例を見てみよう。

- (11) 或日、けたたましく犬の吠える声がするので、内供が何気なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片をふりまわして、毛の長い、痩せた尨犬を逐いまわしている。それも唯、逐いまわしているのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囁しながら逐いまわしているのである。内供は、中童子の手からその木の片をひったくって、したたかその顔を打った。木の片は以前の鼻持上げの木だったのである。(芥川龍之介「鼻」)

「その木の片」は先行文脈にある「二尺ばかりの木の片」のことを指し示している。「木の片」は先行文脈にあるので、反復である。

後続名詞類を調べてみると、言い換えの場合、「コノ」「ソノ」はともに上位型とラベル貼りのものが多くみられる以外、「ソノ」は類義型のものも多く見られる。

(12) 少女は含み笑いの声を立てながら、荷物をまとめはじめた。そして、ちらりと横目で油井を睨んだ。その眼は、意外に媚めかしい色で光った。(吉行淳之介「樹々は緑か」)

「その眼」は先行文脈にある「横目」の言い換えである。また、「眼」は「横目」と意味が近く、類義的なものである。これも反復に近いといえる。

3.3 後続名詞類が「人間行動」である場合

本稿で言う人間行動とは具体的に言えば、笑う、行くなど具体的な動作を表すものと、喜びや苦悶など心情を表すものである。この場合は、「コノ」「ソノ」はいずれも反復より、言い換えの例が多く、その中でも、ラベル貼りが最も多く見られる。

例(5)で既に挙げたように、「この作業」は先行の作業の具体的な行動をまとめて、ラベルを貼るように言い換えているのである。次に「ソノ」の例を見てみよう。

(13) それから、ふいにジープがむきをかえると村へ入って来た道をひきかえして行った。村の人間は子供もふくめて誰一人それに注意をはらわず、ごく日常的な動作をしていた。道が村を出はざれるところで、女の子供が犬の耳をなでてやっていた。外国兵のなかでいちばん澄んだ青い色の眼をした男が菓子の包みを投げてやったが、女の子供も犬も身うごき一つしないでその遊びをつづけた。(大江健三郎「不意の唾」)

「コノ」「ソノ」の後続名詞である「作業」と「遊び」はいずれも短い名詞で先行行動の内容をまとめるため、ラベル貼りが多く用いられているのであると考えられる。

また、「ソノ」においては、類義型の言い換えも多く見られる。

(14) 山田理髪店の背の高い椅子に坐った一郎の髪の毛をつまみ上げて、山田は、
「いよいよ丸坊主にするのか、ちょっと情ない心持だろ」
と言い、鏡の中の一郎の顔を見てニヤリと笑った。
「平気さ」
一郎は笑い返したが、その笑いが幾分かわばった。

(吉行淳之介「樹々は緑か」)

「その笑い」は「一郎」の「笑い返した」という動作を意味し、類義型の言い換えである。「笑い返した」は動詞であるが、「この笑い」となると、「笑い」は名詞である。意味は似ており、重なるところがあるが、品詞が違う。

調査によると、後続名詞類として、「作業」「遊び」「格闘」など行動を表す語、「悩み」「感じ」「衝動」など心情を表す語が多く見られ、先行行動をまとめるようなラベル貼りが多い。

3.4 後続名詞類が「事態・様相」である場合

後続名詞類が事態・様相である場合、「コノ」「ソノ」はいずれも言い換える例が多く見られる。

(15) 里子はよびかけた。

「和尚さんが呼んではる」

「は」

慈念は小さく返事すると立ち上った。

「あんた、だまって学校休んどるそうやないの。先生が叱りに来やはったえ」

里子はしかしこの言葉をなるべくやわらかくいったのである。

(水上勉「雁の寺」)

「この言葉」で先行の里子の発言をまとめて承けている。(16)のように、一般的に事態・様相の叙述はかなり長い。それを「コノ～」または「ソノ～」で承けて、短い名詞類で先行の長い内容を指示し、まとめるような言い換え、すなわちラベル貼りが多いと考えられる。「ソノ」の場合も同じである。

(16) 彼は小江が恐ろしい人のような気がして弱った。こんな事ではならぬと思って頭を殊更に今自分がなし遂げつつある侍としての使命に向けて見たが、然しこの場合たしかに美しい小江は強者で醜い自分は比較にならぬ弱者だと思わずにはいられなかった。性の異う関係で美醜が直ぐ様強弱になる場合があるものだが蠣太には殊にその感が深かった。彼はその圧迫に堪えられない気がした。彼は落ちつきなく廊下から人のいない側の部屋に入ったり、又出たりしていた。

(志賀直哉「赤西蠣太」)

「その圧迫」は先行の長い内容を指示しており、ラベル貼りの言い換えである。

後続名詞類として、「コノ」「ソノ」はいずれも「こと」「言葉」「話」「様子」「姿」など長い事柄をまとめるような語が多く見られる。

3.5 後続名詞類が「時間」である場合

「コノ」「ソノ」は後続名詞類と一緒に、時間・場所を表現することができる。この点において、「コレ」「ソレ」と違う（「コレ」「ソレ」は時間と場所を表すことができない）。まず時間の場合を見てみよう。

後続名詞類が時間である場合、「コノ」「ソノ」は大部分は代行指示である。語り手が事件の進行を語り、ある動作または事柄が起こり、すぐ次に、自然と「その時」か「この時」が出てくる。そのため、代行指示になりやすく、指定指示が少ないのである。【表 2】によると、反復と言い換えの用例は量的にはあまり差が見られない。

- (17) 慈念の通学している紫野大徳寺にある中学から、蓮沼良典という教師が孤峯庵をたずねてきたのは七月十二日のことだった。この日、折悪しく慈海は風邪をひいて寝ていた。

(水上勉「雁の寺」)

「この日」は先行の「七月十二日」の言い換えであり、「日」は先行詞の上位語で、上位型の言い換えである。

- (18) 前夜まで、——唯今のような、じとじと降の雨だったのが、花の開くように霽った、彼岸前の日曜の朝、宗吉は朝飯前と言うが、やがて、十時。……此处は、ひもじい経験のない読者にも御推読を願って置く。が、いつに成ってもその朝の御飯はなかった

(泉鏡花「売色鴨南蛮」)

「その朝」は先行の「日曜日の朝」を意味し、「朝」は反復して用いられており、反復である。

調査によると、代行指示の場合は「時（とき）」（「この時」「その時」）が多いのに対し、指定指示の場合、「日」「朝」「晩」など時間の単位を表す語が多く見られ、(17) (18) のように、先行詞を反復し、または言い換えて再指示しているのである。

3.6 後続名詞類が「場所」である場合

後続名詞類が場所である場合、時間の場合と似ており、代行指示が多い(特に「ソノ」のほう)。代行指示が多い原因は時間の場合と同じく、ある場所である動作と事柄が起こり、そのすぐ次に「その傍」、「その辺り」のような表現をとっているためであると考えられる。

一方、指定指示において、「コノ」「ソノ」はいずれも反復が多く見られる。

- (19) 安寿は泉の畔に立って、並木の松に隠れては又現れる後影を小さくなるまで見送った。そして日は漸く午に近づくのに、山に登ろうともしない。幸にきょうはこの方角の山で木を樵る人がないと見えて、坂道に立って時を過す安寿を見咎めるものもなかった。

後に同胞を捜しに出た、山椒大夫一家の討手が、この坂の下の沼の端で、小さい藁履を一足拾った。それは安寿の履であった。

(森鷗外「山椒大夫」)

- (20) わたしは気をしずめて広小路の四辻に立った。そして、谷中のほうへ行く電車をしばらく待っていたが、どうも来そうなけしきがなかった。わたしはまたあるき出して上野の山にのぼった。これから東照宮の境内を抜けて、山の下の道において、谷中まであるいて行こうというつもりである。その谷中に行くということは、わたしがきょうわざわざここまで出て来た目的であった。

(石川淳「焼跡のイエス」)

(19) の「この」が修飾するのは「坂の下」や「坂の下の沼」や「沼の端」ではなく、直後の「坂」である。「この坂」は先行文脈の「坂道」の「坂」である。先行文脈の反復と見なす。(20) の「その谷中」は先行の場所の「谷中」の反復である。

このように、指定指示の場合、「コノ」「ソノ」は後続の「谷中」「久間家」「敦賀」のような固有名詞で場所を表すもの、または「坂」「寺」「山」「市街」「部屋」「港」のようなものと結合して、先行文脈を反復または言い換えて再指示するのである。

3.7 後続名詞類が「抽象的名詞」である場合

抽象的名詞とは、「コノ」「ソノ」と結合して、接続詞に近いものである。

たとえば、「おかげで」、「場合」、「方面」、「ため」など前後の接続関係を示す抽象的なものである。これらは具体的な事物や様相とは違う。この場合は時間、場所の場合と似ており、「コノ」も「ソノ」も指定指示が少なく、代行指示の用例が多く見られる。

たとえば、先行文脈にある内容が叙述され、その直後に「そのため」で、前後の内容を繋ぐ。「そのため」という表現は接続的な関係を示すものであると考えられる。「そ」を用いて直前の内容をうけ、「のため」を付け加えて、やや接続詞的な働きをしており、前後の内容を接続しているのである。

指定指示の例は少ないが、反復と言い換えが両方見られる。

(21) 弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに対する反感よりは、内供のそう云う策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであろう。弟子の僧は、内供の予期通り、口を極めて、この法を試みる事を勧め出した。そうして、内供自身もまた、その予期通り、結局この熱心な勧告に聴従する事になった。(芥川龍之介「鼻」)

「その予期通り」は先行の「内供の予期通り」の反復である。「予期通り」のような前件と後件を繋ぐ表現は代行指示に用いられやすく、指定指示に用いられる現象が少ないと考えられる。

このように、抽象的名詞の場合、「コノ」「ソノ」は指定指示に用いられにくいのである。

4. まとめ

本稿では、小説における「コノ」「ソノ」の指定指示とその下位項目の分類を規定し、これらの指示用法と「コノ」「ソノ」の後続名詞類のカテゴリーとの関わりを考察した。それに伴い、小説における「コノ」「ソノ」の指示用法の傾向も判明した。その結果をまとめると、以下のようになる。

- (1) 大きな傾向から見れば、「コノ」と「ソノ」は両者とも指定指示に多く見られ、一般的に、「コノ」「ソノ」は指定指示に用いられやすいと考えられる。また、指定指示において、反復の場合に、「コノ」「ソノ」は両者とも見られる。一方、言い換えの場合に、庵の指摘した通り、

「コノ」のほうが用いられやすいことが確認された。しかし、「コノ」ほどではないが、「ソノ」も用いられるのである。

- (2) 言い換えの下位項目から見れば、「コノ」「ソノ」は似ており、いずれも先行文脈をまとめるようなラベル貼りに用いられやすいという共通点が見られる。一方、反復に近い類義型の言い換えの場合においては、「ソノ」のみ用いられるという相違点が見られる。「ソノ」は本格的な言い換えに用いられにくい証拠と考えられる。

- (3) 後続名詞類のカテゴリーと指示用法とは関りがある。「コノ」「ソノ」はともに「人間行動」「事態・様相」「抽象的名詞」の場合に言い換えが多く、「物質」「場所」の場合に、反復の例が多く見られる。一方、「人物」「時間」の場合に、「コノ」は言い換えが多いのに対して「ソノ」は反復が多いという相違点も見られる。

- (4) 言い換えにおいて、「人物」「物質」の場合に「コノ」「ソノ」はともに上位型の言い換えに用いられやすく、「物質」「人間行動」「事態・様相」の場合にラベル貼りに用いられやすいと考えられる。「時間」「場所」「抽象的名詞」の場合、特に「抽象的名詞」の場合に、言い換えに用いられにくいのである。このように、カテゴリーの性質によって言い換えの種類が違っているのである

以上のように、庵の言う言い換えにおいて、「コノ」が使いやすいことが確認されたが、「コノ」しか使えないとは言い難く、「ソノ」も使用されていることが確認された。「コノ」「ソノ」の指示用法の分類、またそれらと後続名詞類との関わりも明らかになった。「コノ」と「ソノ」がカテゴリーにおいて使用傾向が違ことが判明したため、今後の課題として、その原因を究明したいと思う。

注：

- (1) 20 編の小説は以下の通りである（総計 20 編、約 36 万字。すべて CD-ROM 版『新潮文庫の 100 冊』にある中・短編小説である）。

- ①「山椒大夫」（森鷗外、1915 年）、②「高瀬舟」（森鷗外、1916 年）、③「鼻」（芥川龍之介、1916 年）、④「芋粥」（芥川龍之介、1916 年）、⑤「生まれ出

づる悩み」(有島武郎、1918 年)、⑥「赤西蠣太」(志賀直哉、1918 年)、⑦「小僧の神様」(志賀直哉、1920 年)、⑧「壳色鴨南蛮」(泉鏡花、1920 年)、⑨「ある心の風景」(梶井基次郎、1926 年)、⑩「冬の日」(梶井基次郎、1927 年)、⑪「焼跡のイエス」(石川淳、1946 年)、⑫「変化雑載」(石川淳、1948 年)、⑬「パニック」(開高健、1957 年)、⑭「不意の唾」(大江健三郎、1958 年)、⑮「樹々は緑か」(吉行淳之介、1960 年)、⑯「雁の寺」(水上勉、1961 年)、⑰「初夜」(三浦哲郎、1961 年)、⑱「焼土層」(野坂昭如、1968 年)、⑲「まゆ墨の金ちゃん」(池波正太郎、1972 年) ⑳「芸者変転」(池波正太郎、1972 年)

- (2) 拙稿「小説における「コノ」「ソノ」の代行指示用法——後続名詞類との関わりを中心に——」(『同志社国文学』(80) 2014)において、カテゴリーの分類の基準が規定されている。
- (3) 金水・田窪(1990)は「解説のコ」を提起し、話し手があるまとまった内容を解説する際、聞き手に対して内容の把握、情報量などの点において優位に立って、「コ」を用いると述べている。情報量において優位に立っているということは、その内容をよく知っており、心理的に対象に対して親近感を持つということである。正保(1981)が指摘したように、「情報の焦点となるものは「コ」で指示されることが多い」のであり、つまり、「コレ」は表現事物を焦点化する機能があるという点である。要するに、「コ」は事物に焦点を当てて、解説的に表現する性質を持つ。
- (4) 正保(1981)は「ソ」は平静で客観的な指示に用いられると指摘しているように、「ソ」は書き手(語り手)の客観的・中立的な態度を示している。

参考文献：

- 庵功雄(1995)「コノとソノ」『日本語類義表現の文法(下)』宮島達夫・仁田義男(編)くろしお出版
- (2007)『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 金水敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3
- 正保勇(1981)『「コソア」の体系』『日本語の指示詞』国立国語研究所 大

蔵省印刷局

竹田完次（2001）「ソノとコノの指示文脈」『計量国語学』23（2）

張子如（2014）「小説における「コノ」「ソノ」の代行指示用法——後続名詞類との関わりを中心に——」『同志社国文学』（80）

堤良一（2012）『現代日本語指示詞の総合的研究』ココ出版

林四郎（1972）「指示連体詞「この」「その」の働きと前後関係」『電子計算機による国語研究 IV』国立国語研究所

——（1983）「代名詞が指すもの、その指し方」『朝倉日本語新講座 5 運用』朝倉書店

藤井俊博（2004）「物語文における指示語と視点：「羅生門」を通して」『同志社国文学』（61）

堀口和吉（1978）「指示語コ・ソ・ア考」『論集日本文学日本語 5 現代』角川書店

三枝令子（1998）「文脈指示の『コ』と『ソ』の使い分け」『一橋大学留学生センター紀要（1）』

『分類語彙表』（2004）増補改訂版 国立国語研究所編 大日本図書

（西北大学副教授・同志社大学大学院生）